夢を信じて

えのきどいちろう

あなたが子どもの頃に抱いた夢は？　アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、元プロ野球選手で、現在は横浜DeNAベイスターズの地域貢献グループで活躍されている畠山準さんです。

第10回

元プロ野球選手／
横浜DeNAベイスターズ職員

畠山 準（はたやま ひとし）さん

「どうやって練習しようかな」、「こう打ったらよくなるかな」って自分で考えることが大切ですね

――「この人との出会い」で大きかったっていうのはやっぱり蔦さんでしたか？

畠山　蔦先生ですね。

――どんな存在でしたか。

畠山　どんな存在って言われても。ほとんど会話もしてなくて、「はい」と「はっ」しか言えなかったような、雲の上の人ですね。僕が中学3年生の時、池田高校は春夏とも甲子園に行って夏に準優勝してるんです。だから人気が集まって僕らの代は30人位がバーッと野球部に。でも、僕は最後の夏１回しか甲子園には行けなかったんです。１年から3年の夏まで5回のチャンスを4回つぶしてるんで、最後の夏はすごいプレッシャーでした。最後の最後に甲子園に行けた時はうれしかったというより、ほっとしたことを覚えていますね。

――野球を覚えたのは？

畠山　小学校入る頃にはもうキャッチボールを親父とやってましたね。グローブを親父が買ってくれて。小学校2年生で少年野球チームに入って、6年生くらいになるころには、親父が庭にマウンド作ってくれました。

――すごいですね。

畠山　まあ田舎なんで、土地が広いんですよ。

――厳しいお父さんでしたか？

畠山　小学校の時から親父とずっと夜も練習してました。昔の人は、走らなあかん、足腰鍛えろ…っていう考えがあるんでしょうね。家にいてもいつも「走ってこい」って言われてましたね。もう本当に毎日毎日、練習。土日だけじゃないんですよ、平日も。練習終わったら、家帰ってまた練習。本当に「巨人の星」の星一徹みたいな親父でしたね。

――子どもが野球をやるときに、何を思って、何を大切にするといいですか？

畠山　「どうやって練習しようかな」、「こう打ったらよくなるかな」って自分で考えることが大切ですね。

――頭がいいとか、メンタルが強いとか、自分を持っている子。そういう子がやっぱりプロ野球選手になってるって思うんですけど。どうですか？

畠山　「投げ方がこうだから、こうして、こう」ってアドバイスをした時に「どういうことなのかな？」って考えることですね。バッティングにしても「バットがこうなっているよ」と言うと「どうやって直そうかな？」と考える。教えたことを理解する。そういう子は野球に対して、いい意味でズル賢くなるんですよ。試合の中でもちょっと隙をみてパッと走ったりとか。

――なるほど。

畠山　いろんなことを考えて、上手くなっていくと「あの子センスあるね」って言われるようになります。プレーひとつにしても、いつも正面入ってないとキャッチできない子がちょっと要領を覚えて逆シングルで取って、ピュと投げたりしてくる。最初はぎこちなくても、自分で考えて工夫しだすと、足の運びとかハンドリングとかも変わってくる。

――工夫する子は伸びますよね。

ユニフォームを着ていられるっていうことが一番の力

――プロ入り後、ピッチャーを断念してバッターに転向して、そしてオールスターに出たというストーリーは、目標とか夢ってものを考えるときに畠山さんが証明したすごく大事なことだと思うんです。「ダメな時もあるんだよ、負ける時もある。でも、そこから頑張ってまた自分の生きる道を作っていくんだよ」って畠山さんは子どもたちに言えると思うんです。

畠山　子どもたちにだけではないかもしれないですね。

――ないと思います。

畠山　ピッチャーで入ったんでピッチャーで終わりたかったっていうのが理想でした。でも、ピッチャーではダメって烙印を押されてあきらめかけた時、バッターとしてのチャンスをもらったんです。そのとき「もう１年、ユニフォームを着られる」って思ったんですね。プロ野球のユニフォームを着られるんだから、やってみようと切り替えたんです。オフはずっと南海の室内練習場の鍵預かって、正月もずーっとバット振ってました。ユニフォームを着ていられるっていうことが一番の力になったんですね。ユニフォーム着られるだけでもありがたいなあって。

セ・リーグはテレビ中継があるから親父にも野球やってるところを見てもらえるなって

――横浜にはテストで来ましたよね。

畠山　ダイエーを戦力外になったとき、親父に電話したら「ご苦労、帰って来い」って言われたんですね。ご苦労さんなんて言ったことない親父だったんで心に響きましたね。「これはもう一回やらなあかんな」と。そう思ってた時に横浜からテストの話をもらって。この時も「もう一回、ユニフォーム着られる。まだチャンスある」って。

――どうして打者として成功できたと思いますか？

畠山　成功したとは思わないですけどね。タイトルとかも何もないし。でも、その時は子どもがまだ小っちゃかったんで、「お父さんの仕事なあに？」、「野球選手」ってわかるぐらいまで頑張りたいと思いましたね。

――その移籍…移籍っていうのか、結果、大成功ですもんね。僕らは甲子園の優勝投手が泥にまみれて練習してバッターで再生して、テスト受けて頑張っているという姿に感動しました。ジャイアンツ戦強かったもんなぁ。

畠山　セ・リーグはテレビ中継があるから、親父にも野球やってるところを見てもらえるなって。

――ベイスターズ優勝の時もいましたからね。南海がなくなるとか、いろいろあった17年。身体も強かったと思うんですけど、今もずっと野球のお仕事をされている訳だから、これはお父さんに感謝しないとダメですね。

畠山　親父が小さい時に教えてくれたっていうことが僕の一番の基礎なんですよ。だから、子どもたちには野球やってる今を大事にしてもらいたいなと思いますね。

PROFILE プロフィール

畠山 準（はたやま ひとし）さん

元プロ野球選手。1964年6月11日生まれ。徳島県出身。名将・蔦文也監督率いる徳島県立池田高等学校のエースで4番を任され、高校3年夏の甲子園で優勝を果たす。その秋ドラフト1位で南海ホークスに入団。投手としての活躍が期待されたが、故障などの影響もあり、打者に転向。1991年に横浜大洋ホエールズに入団すると、主軸打者、そして代打の切り札として活躍、1998年の日本一にも貢献した。1999年オフに現役を引退、球団職員として現在は地域貢献グループに在籍する。

取材を終えて

畠山準さんは大谷翔平より先に「二刀流」を地で行った選手だ。甲子園のスターが鳴り物入りでプロ球界入り。投手として将来を嘱望されながら故障のため打者転向。ご自身が望まれての「二刀流」ではなかったが、その努力と克己心は素晴らしいと思う。いや、打者としてオールスターの常連になった「苦労人の物語」はひとの心を打つ。経験に磨かれて一流の野球人ができあがった。畠山さんの経験は間違いなくベイスターズの財産だ。

今回のインタビューをテーマにしたコラムが横浜スポーツ情報サイト[ハマスポ]オフィシャルライターコラム**「えのきどいちろうの横浜スポーツウォッチング」**（5月25日公開予定）でご覧いただけます。併せてご覧ください。 URL https://www.hamaspo.com/enokido